

環境や安全に配慮しながら、使用済みの薬品付着容器をどう処分するのか。容器回収の体制が万全とはいえない輸入原料が増え続ける化学業界の大きな経営課題である。ポリ容器マテリアルサイクルの専門業者として成長する大阪・貝塚市の川瀬産業は、こうした扱いが難しい廃容器の処分に悩む化学業界の救世主として存在感を年々強めている。



川瀬幸久社長

容器の引き取り契約を結ぶ顧客は600社以上。川瀬幸久社長は「さまざまな薬液が付着しリサイクルが難しい廃ポリ容器の洗浄・粉砕に精通していると自負している。小型から大型（1トコンテナ、大型タンクなど）まで幅広いサイズの容器を洗浄・粉砕できる体制を整えており、厳しいニーズにもきめ細かく心えられるのが最大の強みだ」と

全国展開へ新計画始動

ポリ容器再生で存在感

胸を張る。

自社の再生プラスチックを素材にした合成木材「リプラギ」を商品化するなど意欲的な同社に対する顧客の評価は高く、取引先も大手や中堅、中小の化学メーカーだけでなく専門商社と層は厚い。企業理念である「環境ビジネスで社会に貢献したい」を旗印に、資源を有効活用する循環型社会の実現に貢献する新事業を次々と策定し、東日本進出を目指して2011年に建設した第3拠点の静岡工場（静岡県磐田市）の稼働が軌道に乗ったことを受け、全国各地の樹脂リサイクル会社と提携し使用済み容器再資源化を全国展開する新プロジェクトが始動した。

「関東地区3社、中部地区1社と提携した。今後、提携を西日本にも広げていく」（川瀬社長）。物流費の削減だけでなくCO₂対策にもなるこの取り組み。鉄道を活用するモーダルシフトも構想しており、再生プラスチック価格の変動に苦しむ業界の新たなビジネスモデルとして注目されそうだ。